

令和4年度 第1回 学校運営協議会

1 日 時 令和4年5月11日(水) 午前9時30分から午前11時まで

2 場 所 静岡県立伊豆の国特別支援学校 会議室

3 参加者

○学校運営協議会委員

若林 高至 様 なのはな相談室 室長
山田 芳治 様 社会福祉法人春風会 障がい統括施設長
中村 裕子 様 伊豆の国市韮山地区 民生委員・児童委員 主任児童委員
東方 慶 様 三島市手をつなぐ育成会 理事
山元 薫 様 静岡大学 教育学部 特別支援教育 准教授
宇佐美 祐三様 伊豆の国特別支援学校 P T A会長

○教職員

校 長 早田 公子 副校長 廣瀬かよ子 教 頭 植松 隆洋
事務長 鈴木 健夫 小学部主事 渡邊 康子 中学部主事 水野 靖弘
高等部主事 伊賀 美紀 教務課長 岩谷 俊宏

4 内 容 【進行】山元コーディネーター

- (1)開会
- (2)校長挨拶
- (3)学校運営協議会委員任命
- (4)校内及び授業参観
- (5)協議等
令和4年度学校経営計画等説明
学校運営協議会委員から感想や質疑・承認
- (6)閉会

5 議事録

校内及び授業参観後の感想等

- 委員 ・相談室も開園して8年目を迎えた。小学部にも卒園生がいる。落ち着いて授業を受けられているし、できるようになっていることが増えている。
- 委員 ・1年前と比べ学校の形ができています。安全で過ごしやすい場所となっているため落ち着いて学習に取り組んでいる。
- 委員 ・昔と比べ児童生徒が落ち着いて生活しているのは、早期療育が進んできていることもあるかと思う。
- ・一人一人の児童生徒が体育的行事に向けて好奇心をもち、みんなが一つのことに向かって取り組んでいる。参観者がいる等いつもと違う状況でも授業に向かうことができているのは、児童生徒の興味のある内容や活動になっている証拠である。

- 委員
- ・学校全体が、手作り感も織り交ぜられ学校の色が出てきている。児童生徒たちが馴染める空間となってきた。小・中・高と参観することで、12年間それぞれの成長が見て取れる。今後も児童生徒たちに寄り添ってほしい。
- 委員
- ・新入生も入り学校の規模が大きくなっていることは、1年間の学校の教育の成果であり、地域に理解を得られている証拠である。この地域における知的障害教育の専門性を期待されている。
 - ・児童生徒の育ちや成長は、教職員が専門的な研修を積み重ねてきており、教材・学び方・学ぶスピードが実態に合っている証拠でもある。今年度新たに赴任した教員は不安さもあるかと思うので、支えていくことも必要である。
 - ・環境面が整ってきている。また、教員の教科指導における板書の力も身につけてきている。ここで何をやればよいのか等の生活習慣が身につくような仕掛けを12年間通してどう作っていくのかも重要な視点となる。

学校経営計画説明と説明後の質問・意見等

- 校長
- ・学校教育目標具現化の柱は、【安全・安心】【専門性】【連携】【チーム学校】の4つである。成果目標や担当部署においては、それぞれの部署でできることを検討して作成した。
- 【安全・安心】**
- ・昨年度、階段でのケガが1件あった。それ以外に大きな事故がなく1年過ごすことができた。2年目も気を引き締めて引き続き取り組んでいきたい。
 - ・緊急時、災害時における地域との連携を、地域の防災会議等で構築していきたい。
 - ・人権の尊重において重点的に取り組む。東田直樹氏の講演会を通して、言葉での表現が難しかったり行動が思う通りできなかつたりするときの児童生徒の思いを共有できるようにしたい。また、静岡大学の香野教授に協力を仰ぎ、ケース会議で支援の仕方アドバイスをいただき「本人が何を望んでいるのか」という視点で学ぶ機会としたい。
- 【専門性】**
- ・昨年度、カリキュラムマネジメントシートやシラバスを見直し必要に応じて改訂を行った。12年間の学習の積み重ねを引き続き実施していく。
 - ・授業実践力の向上に重点的に取り組む。ラーニングマップの活用を通して、児童生徒が何を学びどのような力が身についたのか学習評価を行っていく。1月18日に公開研究会を行い、2年間の成果を県内外の先生方に参加していただき、研修を深める機会としたい。
 - ・「なぎのはプラン」をキャリア教育の視点で見直し、それぞれの学部で大切にするための共通理解を図りたい。

【チーム学校】

- ・教職員一人一人が主体的に学校づくりに取り組めるようにしたい。面談等を通して、どういことをやりたいのか聞き取り、積極的に学校経営に参画できるようにしたい。

【連携】

- ・「つなぐつながるプロジェクト」を組織として位置づけて取り組んでいく。1年目はコロナ禍で地域に出ていけなかったため、2年目はコロナ禍ではあるが、できることから取り組み、地域とのつながりを構築していく。
- ・今年度新たに作成した学校案内や教育相談のパンフレットの配布、児童生徒の作品の展示やホームページへのアップ、学校間交流・地域交流の計画実施をしていく。
- ・教育相談の窓口として、各学部にコーディネーターを設置し外部への支援と合わせて校内への支援も充実させていく。

- | | |
|----|--|
| 委員 | ・東部特別支援学校との連携をすることも必要である。また、小学校・中学校とどのように進めていくか重要となる。 |
| 委員 | ・中学校に福祉の授業があり、車いす体験や視覚障害の体験等している。交流をこの授業の中にうまく組み込んでいけるとよいのではないかと。働き方改革と言われている中で新しいことを入れていく難しさはあるが、両校の児童生徒にとっていい時間を過ごすことができるようになるとよい。 |
| 委員 | ・コロナ禍で交流ができなかった中で、このような計画を立てていることに感謝している。地域との関わりと併せて災害時、どのように受け入れられるか、何かできるような交流、連携ができるとよい。無理のない範囲でお願いしたい。 |
| 委員 | ・教育相談のパンフレットは、手をつなぐ育成会の相談者にも配付したい。 |
| 委員 | ・社会の中の学校という視点も大切。交流としての課題として、経済的・物理的な支援は積極的に行われているが、つながりは人と人の触れ合いを通して感じることができると思われるので、何かに向かって協力・協働し合える機会を設けられるとよい。 |
| 校長 | ・今年度、本校を中心に三島・田方地区就業促進協議会を立ち上げ、地域に向けて障害をもった方や障害者雇用への理解啓発を行っていく。7月にらぼーとで職業教育展を実施して一般の方に見ていただく。今後講演会や見学会も計画している。 |
| 委員 | ・落ち着いて学習に取り組むことができているのは、カリキュラムマネジメントシートやシラバスの効果である。授業の骨組みがしっかりできており、日々の営みが質の高いものになっている証拠である。 |
| 委員 | ・ホームページの更新が2週間に1回では少ないと思う。どんな教育をしているのか、どことつながりたいのか、時代に合わせて積極的に情報を開示していく必要がある。社会はつながりたいと思っているところが多いが、社会が特別支援学校を知らないという現状がある。 |

- ・「つなぐつながるプロジェクト」の目的や方法はよいが、成果をどのように把握するのかという計画を立てておくといよい。一年目は種まき、二年目は挑戦、三年目以降は検証となる。

委員

- ・情報発信という点で、学校がSNSを検討することはできないのか。ホームページは興味がないと見に行かないが、SNSであれば社会とコミュニケーションがとれる。

校長

- ・県立高校で利用している学校もある。できないわけではない。

校長

- ・学校経営計画を承認いただけた。今回いただいた意見を反映し、時代に合った学校にしていきたい。